

新装成った「筑紫聖堂」に映える桜花満開

亀井学を大成した

# 大儒 亀井昭陽伝 (十五) 庄野寿人

- ・歳暮と正月、亀井人気を見る
- ・昭陽揮毫に追われる
- ・生月鯨、新年に又々再来

本稿記事の後半は、主に昭陽の『空石日記』を中心に進めている。

この昭陽日記は「文政元（二八〇年）九月一日に起稿される。日記の終りは、亀井家の別冊『萬曆家内年鑑』の天保六（二八五年）の項に、後嗣の鉄次郎・号陽洲によって先考日記九月七日に止む」と記録される。まさに昭陽の晩年十七年間にわたる自筆日記である。

昭陽は、翌天保七年五月十七日己亥戌刻（みのい・いぬのこく）、午後八時頃、享年六十歳で死去しており、これで昭陽は約九カ月間を病床にあったか、又はこの間は筆記が出来なかったことがわかる。ただ日記原本は、六年八月四日記事が中断する格好で日記本紙が失われており、このため、結局九月七日に至る約八カ月の記録を欠いていることになる。それにしても、昭陽自筆一冊という記録で、別に写本があるわけではなく、現存日記の貴重さがわかる。とくに

本書は『烽山日記』のように余人又は後世に閲覧されることを意識しない自家日記である点も認識しなければならぬ。

同年は閏に当り七月が重なるが、五月一日の記事四行、以後は一日一行という記事が多く、日を書いて記事なしも見られ、昭陽の衰弱がうかがえるのである。

六月廿一日は「揮三枚」の三字だけ。これは揮毫を求められており、半折紙三枚を書いたことで、よくも揮って書いたものと文字通りにうかがえる。

六月晦日は「一世也來問病宿」の六字である。これは昭陽三女の「世來たり、自分の病を見舞ってくれ、泊まった」この六字表現である。

七月廿八日、揮五紙とあり、例によって書五枚に筆を揮った、とする。わずか一日おいた閏七月朔日は、これもまた揮三枚の三字だけ。病体の昭陽を世間は知らず、依頼にこたえ書

写真：杉山 謙

三枚の揮毫である。

閏七月四日、揮八紙、七日には揮五枚、となる。こうした調子は従前の昭陽には見られない。どうかするのと三ヶ月、或は半年も求めに依じて書かないことがある。よくも三日をおかず筆を揮ったものと思われる。おそらく、昭陽は己の余命を考えて自分を酷使したとされる。

翌八日、揮絹大幅二行六枚。大通寺の人、玄中需む、に承諾する。

九日、音九郎需む。全紙六、大絹一、統一、小絹三、扇三、画賛一。とあり、これにも応じる。こうした昭陽の気魄は異様で、かつ凄惨を感じさせられる。

以上は昭陽日記の終りを自分の参考に見ての筆記である。

以下、本稿の順序(文政己丑・正月)にもどります。

文政十二年の元旦、昭陽は暁天に起き、井華水(例によって自宅井戸の初水を云う)を汲む。雨天で寒も強い。家人(亀井家の男召仕)の玄沖と裏吉が雨仕舞い(風雨を防ぐ戸締まりなどよくすること)をする。鳥越式部(前年に入塾し神官である)が来り神壇と祠堂に祓ふ。

まさに午、氣力満ち書を展く。即ち直幅(半折紙)九枚、横額二紙に揮い、独酌して臥す。夜、燈下に会

計する。

風雨もあり内外生で来賀する者十二名、このため昭陽も正月を独り閑散とした中に揮毫の氣を持ったものであらう。外書生の鳥越式部による神壇、祠堂にお祓いが昭陽の氣分を爽快にしたものか。亀井入塾は寺僧は多いが、神職は通じて三名、式部はその内の一人である。

燈下の会計は、年末にしているがその中の仕残しであらうか。

二日、風雨なお甚し。後に雪となる。三女の世が月琴を弾く。昭陽は式部に謝辞の一詩を作す。以前から依頼されていた肥前の鹿島藩主鍋島侯像に画賛する。

夜は、自稿本に釘す(本を糸でとじること)。

三日、風雪。

鉄次郎の詩稿を削訂し、次韻一首を作す。午、中村乙年賀に来り南金(二朱のこと、一兩の八分ノ一)と酒一升を持参。吉富玄洞年賀、南金中川弥三郎酒三升。松田俊達南金。甚太夫酒。生民より雷首、友と紅児は雪やんで来る、と伝言あり。

この生民(博多住)は南冥の医師弟子で最も優秀、亀井家の主治医かつ亀井医学の後継者として雷首に次ぐ信頼をおく。亀井家族に準じることが、本人は未だ養子話に乗らない。南冥

生前から亀井医師の相続者に目されていた。従って生月益富家の主治医も雷首を次ぐことを了承していた。

午後、鉄次郎を昭陽代理とし崇福寺年賀に行かせる。

四日、風雪近年にない大寒となる。岡忠三郎年賀と酒。博多妙行寺白糖。大乘水り豆腐。

五日、風雪止まず。坂本龍平賀錢拾五錢(一兩の四分の一)。蘭裁南金二歩(半兩に相当)。吉安嘉助方金(一兩の四分の一)。土師良貞銀、深恵銀(二朱銀で一兩の八分の一)、深恵は、糸島郡龍ヶ橋の光明寺住職で昭陽、少乘と親交があった。

夜、喜六需めの三紙と五助が需める蕉布三を揮毫。

六日、風なく雪積みて未だなき美観を呈す。東一郎来り、絹と紙各一を托し賀酒を持参。三木権六、梶原市太郎、安部龍平を拉し来り、家人これに酒する。

七日、天晴。三女世来り七種菜を打つ。五絶詩(五言絶句をいう)を作って昨日の三士に浄書し玄道をして梶原氏に持たす。世の七種を食するに甚だ美し。

裏吉、為吉の二名入塾、若松酒二升、鯛五尾をもたらす。殿上若狭守住吉神符二を五島屋敬と二家にもたらす。大島俊亮南金を賀とす。大沖

鈔三百賀。黄溪賀山中紙一束。元凱賀一方(一兩の四分の一)。元琳そば粉大一袋持参。友と紅児酒二升と小鴨二を持参。

八日、吉甫(広瀬旭莊のこと、現在入門中)の詩稿十五枚を朱註する。肩吾賀南金。大神順良賀酒二升。秋枝助介賀紫海苔。夜、吉甫に詩文を批正す。雪消える。

九日、年賀と到来品の記事省略。

十日、朝、清朗鳥声楽し。

生月の益富又左衛門始め一統の鯨産品到来多数、記事省略。ほか十一名より正月賀品も省略。

夜、丑刻に起き又會計とこれも省略するが、前年の會計は昭陽に珍らしく波滞がある。

十一日、威八郎、周一郎の兩名が日田に帰省するのに吉甫宛の詩文稿訂正を托す。鉄次郎姪浜に行く。これに二宮社、興徳寺に供物料托す。

右に五島屋敬に生月鯨配分する。

玄沖、鯁二本を礼謝として持参す。絵師尾形喜六秋月に行くに、春甫の香奠金二斤(一分斤二枚・半兩)を托す。吉田紀四郎(平陽のこと)書翰を預り来る。内容は讃考裏公一の通関を求める(以下、五人の賀品を略す)。揮七紙。

十二日、鉄次郎、衣非組頭より月俸券(当月は大の月であるので米五

俵八升三合を受ける。小の月は五俵二升五合になる)

十三日、昨夜来、取言易例を大改訂する。(来賀三名を略す)

裏公二、同三を閲了。以上は十一日の秋月吉田紀四郎に答える。

正月から昭陽の健康と調子も至って良い。別にむつかしいこと、心配もなく家庭もとより少栗一家、二女敬の五島屋にも不安皆無という状態である。

十四日、朝来の風雨も午頃にかけて風おだやかに雨も止み、陽射しが見え始めた。昭陽には、少々風呂嫌がある。この日、珍らしく入浴して顔も剃って月代を四女の宗に当たらせた。

折良く、今宿の少栗と紅児が来る。昭陽は自ら書斎の整理と掃除をする、これに少栗が手伝う。

自分の宿題にしていた「裏公四」を閲了する。

十五日、孫・紅児のために「かがみ餅」を割り、ぜんざいを書生たちにも供す。雷首が実家の宗吉を連れ来り一同で祝宴する。

佐藤茂三吉が年が、若松酒二升、護半紙一束を持参。慶次郎、青海堂、鈔二束(一両の四分の一)、紅児と綱太は松囃子見物に行く。

夜、裏公の五、六を閲了。

十六日、昭公一、二、三、を閲了。平蔵来賀、干わらび一籠、書字式一部作る。曾蔵賀酒と馬肉、蛤。忠太夜来るに酒供す。

十七日、二朱金を紅児と三女世、四女宗に。婢はるに百五十文お年玉。小林虎太郎来賀、一分金(二両の四分の一)とはまぐり貝持参。春甫来賀菓子折一箱。茂三に書二幅。

長婿(長女の婿・雷首をいう)大扇二、唐筆墨を甥の宗吾から医術入門に托された、と持参する。

十八日、昭公四、五、六。定公の上、下。哀公上下すべて閲了。

左太夫来るに酒出す。

十九日、丑刻(午前三時頃)起床、自日記の製本を仕上げ。城代家老(三奈木の黒田氏のことか)に依頼

されていた書字を鉄次郎に届けさせる。新作来賀、鴨身と酒二升。正宅賀鈔六十(二両の十分の一)ほか(二名、来賀)を略す。

二十日、昭陽所属の城代組寄りに出る。次男鉄次郎(長男死去のため次男を後嗣とする届済)廿二歳に妻を心かけているが、未だ好配を得ないでいる。妻も最近は気をもんでいる様子で、今日も近く一佳人ありという話に当家の書付けを渡したよう

である。昭陽入浴。夜、東作、次郎来り、酒を出す。

廿二日、本日より左伝讀考に就くところ内氏(妻のこと)より鉄次郎の縁談につき話に入り、讀考は明日に延ばす。五島屋利吉来賀、紫糖一

捲持参。秀児、鈔九十と看。宗像郡久末村大庄屋・城戸五助倅、酒二升と蛤貝持参し、潤筆を乞う。

少栗、紅児親子帰る。松野大休・若松酒。東屋の香大寺、井原の正善寺年賀に来る。

廿二日、風盛り雪散に変わる。案に就き終日、夜に至る。

生月の駿太郎、茂作、又吉、鯨肉と皮身を送り来る。今宿の友と五島屋敬にも分配する。友より返便に胡麻一升五合、その値段百九十文也と。

廿三日、讀考いよいよ緒に就く。岡山俊民に鯨一卷と酒二升を幸便とする。鯨、書生又々「鯨、奢る」とするか。

廿四、高島大亮賀二朱金。昭陽、組の回覧状当番となるが後嗣の鉄次郎に代役させる。

廿五日、赤間関(下関をいう)の人物より島縮緬と鶴酒四升(二升入樽二)これに久我壮次郎鶏卵五十入一籠を托し寿詞揮毫を乞い来る。安兵衛年賀干鰯。駿河・賀小倉鮎。

廿六日、仙溪来酒二升。

廿七日、道太郎来賀雄雉。廿八日、道太郎稿を削る。吉村恂英賀酒二升。平蔵に鯨一塊と銀札三

銭を頒つ。武藤虎吉入学双鯉魚二口と酒。須恵村庄屋来る。これに酒するに道蔵も同席。書生講義を乞う。

廿九日、庄屋、書二枚を需め更科酒二升、鱈児(乾しはえの子)大盛りを受ける。月代を刺り、祠堂(孔子像を置く)を清掃。義弟の山口脛臥来るによって周助と鉄次郎を同席させ酒を出す。夜、書生三名の詩稿を削る。

昭陽日記、以上の調子であるので二月以後は、特記すべき内容のほかに記事省略

二月朔日 詩経講義始む。

四日、外記太夫より大鯛(塩もの)を賜わる。中老筆頭(外記は知行五五二〇石で家老座に就く時は、三奈木黒田氏を筆頭に第二座となる。)で先代以来の亀井家支援者である。

九日、生月の又右衛門(又左衛門の弟)鯨肉皮一卷、熟腸一籠。これに駿太郎(当主又左衛門の長男で亀井塾入門、書生筆頭になる)鯨肉一卷、肉皮一卷、熟腸一籠が到来。

註(熟は、いる。いりつける。むしやく。火にあてて汁を去り熱す)などをいう。

## 死生は命なり

安 陪 光 正

## 能古渡船

二月十日の老荘講義は、前日から珍しい大雪で、風強くして波高しと報じ、明日の能古渡船は大丈夫だろうかと案するほどだった。しかし当日になると嘘のように雪はやみ、空にはボカボカと白い雲が流れていた。波止場に立つと、能古の東三分の一に陽がさしていたが、海には白波が立ち、風は冷たかった。かえりみる雷山から飯盛山にかけて、谷間に雪が白く残っていた。

十二時に能古を発った渡船「フラワーのこ」が、白波をけたてて港に近づいてきた。白い船体で約二〇〇トン、カーフェリーで中央に車輛を入れ、左右両側の一・二階が船室、その上に操舵室が見える。受講生十名余は、いつも先生と一緒にこの船に乗る。船室から遠くに見える背振の山並みを眺めながら、私は先日亡くなった友のことを想った。

## 死の床にて

昨年十二月二十四日夜、中学以来の親友だった君は肺癌で逝った。た

またまその日の昼に、私は君を自宅に見舞った。階段を登って二階の寝室へ案内されると、君は窓側のベッドに横たわり、顔をこちらへ向けたまま、じっと目を閉じていた。顔のそばに小さな洗面器が置かれ、そこに少し茶褐色の胃液を吐いていた。

痛む所はないらしく、苦痛の表情はなかった。奥様によると、二十日に退院して自宅に帰って以来、何も食べられないのに少しずつ胃液を吐くということだった。目を閉じたままじっと動かない君の枕辺によって、「家に帰ってこれてよかったね」と声をかけると、やはり目を閉じたまま、「うん」とただうなずいた。

二十日に退院したのは、死期を覚悟し、死ぬなら自宅(教会)で死にたいという君の意志によるものと聞いた。中心静脈栄養をうけ、胆汁排泄用のチューブに繋がれた君は、すっかりやつれ、まるで別人のように変わっていた。

もう目を開く力もなく、話すこともできなかった。時々嘔気があって、少し口元をゆがめると奥様が洗面器を頬にあてられる。

しばらく待つと、少し気分も落ち着いたらしいので、またベッドの側に腰かける。ふと見ると、布団から右手の指がのぞいていた。少し布団をあげると、胆汁排泄用のチューブが掌の上を通過していた。軽く曲げたその指を一本一本伸ばしたが、君はされるままに指を開いた。細く乾いてカサカサした指だったが、私が両手でその手を包むと、君も軽く握りかえた。暖かな手、君には私がかかっているようだった。

「またくるからね。じゃーさようなら」

と言うと、君は小声で、「ありがとう」

と答えたが、目はやはり閉じたままだった。部屋を出るとき、も一度振り返ったが、やはり君は目を閉じ



能古渡船「フラワーのこ」の入港、後に見えるのは能古島

ていた。その夜君が亡くなったことを、翌朝奥様からの電話で知った。

## 神の意志

一昨年七月二十六日夜、君からの電話があった。元気ないつもの声で、「実はこの間から一寸胸が痛くて、レントゲンを撮ったら精密検査が必须要といわれ、今入院している。その結果は肺癌で胸水もたまっている。手術はできないとのことで、化学療法をすることにしました」

とのことで、私は事の重大さに言葉を失った。三日後にまた電話があった、

「八月一日から化学療法をするつもりで、二、三日外泊して身辺の整理をすることにしていたが、治療は止めて帰宅することにしました」

と言う。その時治療を止めることについて君は何も言わなかったし、私も聞かないままだった。その後君は、さした自覚症状もなく宗教家としての活動をつづけることができた。

発病後一年たった昨年七月、君を尋ねたとき、とても病気とは思えない元気な君に会うことができた。その折、

「何時か聞こうと思ってはいたが、どうして化学療法を止めたのか」と尋ねると、

「実は肺癌で一年半の寿命だろうと言われたとき、化学療法をすすめられて、その気になっていた。ところが祈りをしていて、神の意志のままに生きようと決心し、生死を神におまかせすることにした」と

という主旨の話であった。話を聞いていて、生も死も、哀も歓も、すべてを良しとして受け入れるといった心境のようだった。

荘子は言う

福永光司著『荘子』大宗師篇から死に関する通釈をぬき出すと、

「死生は命なり、人間が生まれるのも死ぬのも『命』すなわち自然の理法であって、それは夜が旦となり、旦が夜となる天体の規則正しい運行が、天——自然の理法——であるのと同じである。自然というのは、人間の力を超えたもの、人間の意志や努力ではどうする事も出来ないものという意味であるが、この人間の力を超えた宇宙的意志に支配されてい

るのが、一切万物の真相なのである」

「人間の惑溺のうち最大のものは、生を希い死を厭う心であるが、一己自己が人という形を具えて地上に生まれ出て、生き難き人生を苦しみ喘ぎ、老いの目を迎えて漸く佚らぎを見出し、死の訪れによってはじめて自己を永劫の憩いに解放するのは、大塊すなわち天地自然の理法であるから、人はただ此の自己の意志と努力を超えた絶対必然の理法に随順してゆくほかはないのである。与えられた自己の生を善しとして肯定する者のみが、与えられた自己の死をまた善しとして肯定する。一切を肯定する者のみが一切を超越するのである」

などがある。私は君が、自分の命を天地万物を支配される神におまかせして、人為を弄さないと云ったとき、君の考えは『荘子』によく似ているから、一度『荘子』を読んでみてはと勧めたことがある。君は『荘子』をハワイ旅行にも持ってきたと、マウイ島からの絵ハガキにも書いていた。荘子の死に対する考えも、君の死に対する考えも、それは単なるあきらめではなく、もっと積極的の意味がある。死もまた善しと肯定する、進んで死を受容する、そんな姿勢が

うかがえたのである。

不言の教

君は化学療法ではなく、死生を神の手にゆだね、生ある限り信仰に生きる生き方を選んだ。幸に病臥するまでの一年余、殆ど自覚症状もなく、今まで通りの信仰生活を続けることができた。昨年九月脾臓転移により再入院したが、毎朝定時に教会へ電話して病状を知らせ、信者さん方への教話を行い、共に神に祈り続けたという。

再入院は胆管閉塞による黄疸のためで、胆汁排泄用のチューブが体外へ導かれ、ベッド下の瓶へ茶褐色の胆汁が滴下していた。食欲が殆どなく、見舞いの度に憔悴していった。次第に目に力がなくなり、口数もへった。しかし意識ははっきりしていて、こちらの話はちゃんと聞いていた。帰る時はいつも、

「ありがとう」と礼を言った。

キュプラー・ロスは、死の受容に至る過程を次の五段階に分けている。一、自分は死ぬはずがない、死なないといった死の否定。二、自分が何故死ななければならぬかと怒り、憤るもがきの段階。三、死を半ば受け入れる。四、絶望してうつ憂とな

る。五、死を受け入れる最後の段階である。我々はこれらの段階を歩きつもとどりつ動揺しながら、死を受容せざるをえないのである。

君の死を省みると、肺癌の宣告を受けた数日後には、既に君は死を積極的に受容したように思われる。死生を神の手にゆだねることによって、死と生を同一視することができたのではないかと、死を否定し、死から逃避するのではなく、死をも積極的に受け入れることができたのではないかと思う。「信は力なり」というのが、信仰によって君のような死の受容ができ、死の病床にありながら心の平安を保つことができたのである。

死の床に横たわる枯木のように瘦せた君、おだやかに眼を閉じてもの言わぬ君が、私には輝いて見え、拝みたいような気持ちにさえなった。君はその時神と共にあったのではないだろうか。日頃接した友人としての君、神と共にある宗教家としての君、私はそこに二人の君を見る思いであった。君は己が死を以て、宗教家として、無言の教を示された。世に「死して亡びず」という言葉があるが、今この言葉が胸中を去来する。

## 亀井塾と鯨の話

亀井塾の書生たちは、外書生と内書生に分けられる。前者は通学生、後者は塾内の寄宿生をいう。亀井塾は藩領の筑前が広く、また他藩からの学生のために早くから寄宿舎を設け、亀井家では内書生に不自由のない気配りをした。

こうした中で一部に「亀井塾の鯨奢り」と評されたことがある。

これは食べ盛りの青年達に大いに満足させた食事のことを端的に言ったのである。当時の鯨身は現代の牛肉にひとしく、また珍重される食品であった。昔は牛も豚も食膳に供されることはまず無かった。これは佛教による影響もあるが、まず四つ足は食わない習慣もあり、また下品にされていた。

こうした中で鯨だけは格別、ただ地域によってはたやすく口にできるものではなかった。普通なら亀井塾とても、書生たちに高価な食事を、ふんだんに提供するなど出来もしない。これには外目にわからぬ特別の事情があったもので以下これを少し述べておこう。

西国筋に捕鯨で知られる肥前平戸の生月島・益富家は筑前福岡の亀井家と先代以来の格別な縁故となるが、それは益富氏先代の徂徠学執心が亀井塾に結ばれ、後に南冥医術にも信頼を得たことによる。

益富家からは一門の子弟が多く亀井塾に留学、徂徠学に基調する実学性、人の情操を豊かにする詩文など教養学を学んだ。

こうした学問と教養は当主家はもとより分家各当主にも人格と見識の豊かさを知られる存在になる。

これらは益富家の名声と好評になって、捕鯨の歴史と共に今日もなお郷土「生月島」の誇りとして伝えられる。

また、加えて亀井家は南冥医学の古医方と蘭方受容に進む医術を認識され、南冥・雷首から生民まで、益富当主に始まってその一族代々の主治医とされる信頼を得た。

この主治医としては、毎年四・十月の年二回に各一カ月を生月往診と滞在。この診察で病歴またはその疑いを予見した場合は、納得できるま

で滞在をつづけ、その状況によって

は亀井医局の練達した医師を呼び寄せて投薬処方と診断をつづけさせる。

また益富家によって蘭方薬の入手もでき、これは洋薬の効験と実証を得ることになり、亀井医術に多大な効果をもたらした。

即ち、雷首の医薬品長崎仕入れ「モルヒネ、キナソー、オイヒム、シッフルコオル、クレオソート」などは本誌13号で紹介したが、これらはすべて益富家の斡旋による。

さて、話題の鯨にもどる。

本誌先号の冒頭「昭陽伝」、文政十年一月の書出しに、益富家から亀井家に多量の鯨産品の到来を書いたが、これらは昔から最良の嗜好食品であり、かつ栄養に富み、薬的効用まで知られていた。

このため内書生たちに、鯨は最高の食膳であり、これが引きつづき食べられるのは内書生に大きな福音として言葉になり話になったのである。これが本稿冒頭の「亀井塾の鯨奢り」となるのである。

また、益富家とその一族から亀井塾に学ぶ者は、年々跡を絶たず、その人柄がいずれも開放的で塾中を賑やかにする存在にされたが、これは益富家の家業がその気性と人物をつ

くったのであらう。

また益富家は、平戸藩政にも多大の貢献をしており、加えて当主（長兄）の優れた人格、見識を見込みに及んで、藩士として馬廻組二五〇石に登用されている。このため同家は先祖「甲州・武田家」時代の本姓「山県」に復して、明治から現代に至っている。

こうして益富家は長兄が平戸藩士ために次弟が捕鯨業を継ぎ、以後代々の家業として固め、かつ大規模に発展させ、「西海一」と評判を得るに至る。

また次代の子孫たちは分家となり、夫々に捕鯨組織内の組持ちになるが、その総支配は当初の本家を立て伝統として一族の固い結束をくずすことはなかった。このため、藩主の松浦家は捕鯨益富家を自藩の水軍として遇することになり、益富家一統も、これを諒として水軍の機能と、その陣立てを意識して平素も組の態勢をくずすことがなかった。

また、藩士山県家からも代々亀井塾留学がつづいており、これは本誌にも再三、登場している。これらは修学を終え帰藩しても師家に音信を続け、この人たちからの歳末と正月贈答の鯨産品は、生月益富家が上方

に急送する仕立て卸鯨身の上積みとして、博多荷揚げする中にあり、これが亀井家に届くのである。

この中には、塾生活の経験者により贈品は、とくに品物の吟味はもとより、日持ちと貯蔵が利く、うす塩にした樽仕込みなど、彼等が亀井家の台所に気をつかい梅雨前まで保蔵できる配慮がされていた。

次に、参考として益富家捕鯨業の概要を説明する。

○捕鯨の収量

享保十八(一七三三年) セミ鯨一六頭  
十九 " " 二五頭  
二十 " " 三七頭  
元文 二元(一七六〇) " 五〇頭

以後、各地に網代(鯨が通り抜ける水路に網仕掛ける場所)に網組を配置する。この装備と操法をくりかえし改良、ついに毎年二百頭以上を捕獲する盛況をもたらしたのである。

この経験を積み、さらに網代を拡張し、長州の通浦、秋沖の見島、仙崎、さらに対馬の廻浦、大村領の蠟之浦、平島、五島領の宇久島および黒瀬などにも網組を派遣し漁場を拡張するに至った。これによって益富家の鯨卸し販路も全九州はもちろん京阪に及び、そ

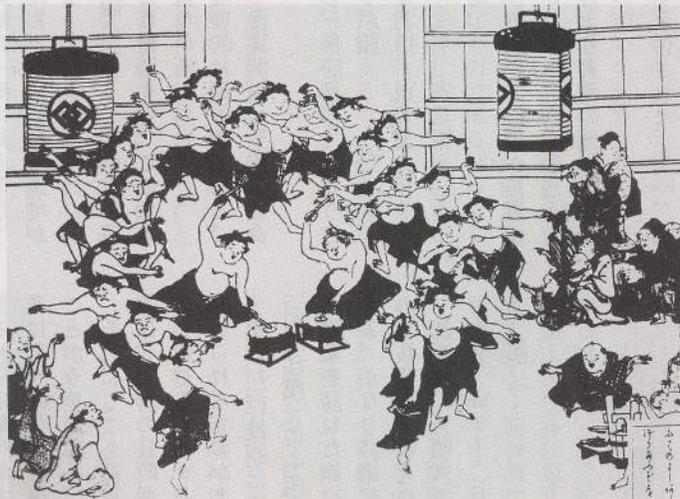
の収益は年十数万両を算した。

益富当主が位置する場所は本陣と呼ばれ、職階として大別当、別当を置き、この別当にはそれぞれに分担業務があった。別当はすべて、一族で屋号「豊

屋」を名乗った。また用人人で、人格、識見ある者は抜擢し屋号の豊屋を名乗らして別当とした。

近藤家から嗣子の妻を迎え、その兄の儀左エ門を大別当として事業の総覧を委託した。

益富家の家風は、勤儉を第一にし代々奢ることがなかった。これが益富捕鯨の永続となり、千人を越える熟練従事者に厚い心服を得ている。しかも公益のためには財を惜しむことがなかった。郷土の島々



捕鯨の唄をうたいながら大漁祝をする益富家の大酒宴

および壱岐などの海面を埋めて、三百戸以上の敷地を造成、また防波堤を築いて船溜りを安全にした。

平戸島、針尾島、福島、佐世保など各地に新田二十五町を開拓。また隣

島の度島の大火には、自分の倉庫を開放して被災者全部を収容、医師を雇用、全島民に食事の提供と施薬をした。

また飢餓者には衣食はもとより、生活の救済を行った。藩主に献金も数度で、概算して十五万二千両

をこえる。ために藩主は益富家を永代士分に遇し、これに鮪網五ヶ所を許して永代無税を特認した。益富家二代又左エ門は、朝廷の仙洞御所造に二万両を献じた。このため伏見

宮家はその子孫を召出し永代の侍として遇した。

同家三代に及んで家業はさらに隆盛となるが、先祖の家憲を守って、奢りを厳しく慎んだ。島内の白山神社の改築、住吉宮の鳥居を奉献、その他社寺に敬神の念が厚く、先祖の遺風をよく守った。

四代正真に至って、徳川幕府の特命をうけ、北海道北面のエトロフ島の捕鯨について探査を行った。しかし海域の鯨は多く見られるが、土地柄が厳寒のため、とても創業は不能と復命したが、次にその詳細を参考にする。

「幕府の北洋捕鯨業始末」

寛政十一(一七九九年)十二月廿二日、幕府の蝦夷地(クナシリ、エトロフ島のこと)係り、御書院番頭松平美濃守外三名連署をもって、松平藩江戸上屋敷の松平壱岐守に、明廿三日御勘定書出頭を命ずる書状が届いた。

翌日、同藩江戸留守居役普沼量平が出頭、直ちに書面を以て次の御達しがあつた。  
一、東蝦夷地のエトロフ島は、鯨が多いという。よって貴藩内の鯨捕り巧者二人を彼地に派遣し、漁場の選定、採算の見積り等を調査す

能古博物館だより

ること。乗船は摂津の辰悦丸（船頭嘉兵衛）使用、来年二月下旬、下関に入港させる。よって下関の間屋納屋七郎エ門方に連絡、両人出向き同船に乗船すべし。  
二、クナシリ、エトロフには駐在役人四名（姓名略）あり。詳細指示をうけること。  
三、右は鯨捕り巧者ならば身分によらず。  
四、下関滞におよび船中の賄いは船頭に申渡しあり。またクナシリ、エトロフにては彼地役人が取り計らうので気遣いに及ばぬ。

右の趣に付き草々御領分に御達しの上、下関へ両人を出発させられたい。以上

右によって、松浦藩江戸役人より平戸役人に飛脚が飛んだ。その結果は、平戸藩から益富家に適任者の選定と所要の着手を下命された。

これで益富家から羽指・寅太夫五十八歳と安兵衛三十六歳が指名された。

翌十二年、藩役人深見又右エ門が両人を引率して平戸から下関に至り三月六日に幕府指定の船頭に両人を托した。翌七日、下関を出帆。

両人は三月廿四日、エトロフ着。以後、種々探検に実働、約六ヵ月。

無事に所要の作業、目的を果たして九月、江戸に到着。その際、エトロフ鯨漁場の絵図二枚を作製。これによって探検の結果を幕府に復命。その要旨は、「ザトウ鯨は、多数見るが、背美鯨は一向に見えなかった。海深が深く、綱代になる適地がない。」

「すべて遠隔の地で、その上に荒海で船の通行は難波する。このために万端弁じ得ない所と見た。」  
要するに地理的に遠距離である。風波が荒く、漁場開拓は至難を復命している。

兩人に対し、幕府は  
肥前国平戸領  
鯨突羽指 寅太夫  
安兵衛

金参拾両

其方共儀 御用に付蝦夷へ差遣候処、帰路いたすに付き、手当として当掛奉行より書面の通り之を下さる。

として金子を下付された。当時、益富家四代当主も江戸に來り、その間の斡旋を行っている。その労に対し、鷲尾九尾、熊皮二枚、八丈五反を、老中も出座し賞詞と共に賜わった。

なお、益富当主三之助と羽指二名の帰国について、伏見まで人足六人

と本馬（乗馬する馬）三頭を付けられ、その上に道中の宿駅に、前もって三名通行に先触れ通達されており、幕府役人の道中通行の待遇であった。江戸出発は十月十五日である。

これらは幕府がエトロフ等北洋漁業に専門的な調査探検を重要視したことがうかがえる。  
それにしても益富一行に対する道中は、幕府の長崎奉行など上級旗本の公用道中に準ずる待遇には、関心させられるものがある。

次に江戸後期に注目される人物「司馬江漢」の『西遊記』に生月の益富家を訪ねた旅行記に捕鯨の状況など、かなり詳細に記録されているので抜粋して参考に供する。

江漢は、天明八（天保）年四月、江戸出発、同年十二月初旬に平戸に入る。折よく捕鯨期であり、その実況を伝えている。以下、江漢本文の訓読である。

司馬江漢の捕鯨見聞記（妙録）

『十二月四日、平戸城下から低い丘を西にこえると薄香という所がある。

そこは深い湾になって良い港であり、古くからの漁村である。そこから小さい五挺櫓の舟のつぎ出

し、須草（日草のこと）という所で船をあがって中食をすました。ここには納屋があって、生月へクジラがはいった時には、ここからも船を出して追うのである。さてここでシビ漁の船にのりかえる。これは六挺櫓の船である。表の方に苦を張って、案内役の山形新四郎（山県）と二人

ですわり、六人のものが「アリヤ、アリヤ」と言って船をこぐ。波が高くて、三里の海を生月へついたのは夕方、やっと生気をとりもどした。そしてクジラ師益富又左衛門の家にはいった。又左衛門は平戸へ行って留守であったが、息子の亦之助が出ているいろもてなしてくるのに、男ぶりはよし、詞もこのあたりの者

とは思えないほどアクぬけしていた。五日、孤子岳（番岳）という山に登った。ここに遠見番所があり、そこにいる六十過ぎの番人は江戸に十年もいたという。

八日には島の西方の松本というところへシビ漁を見にいった。大敷網でとるのだが、多くとる時には一度に千尾もあげることがあるという。そうしたシビを生のまま、西風を利用して九州の北岸を瀬戸内海にはいり、さらに鳴門海峡をぬけて熊野灘の沖を一気に江戸までつききって運

能古博物館だより

ぶ船があった。運がよければ七日で江戸に達したという。これが江戸でいう五島シビで、たいへん高価なもので珍重せられたのである。途中天氣が悪いと港で日和待ちしなければならず、そうすると塩をして腐らぬようにする。塩したものは価がずつと安くなって、江戸へもっていてもそれほどもうけにならなかった。

島の人たちはまったくわれわれの想像もおよばぬほど勇氣もあり潤達であったから、金づかいもあらかつた。だからシビ漁も四国の阿波から力持ちや曲持する芸人がきていて、漁師たちのつれづれをなぐさめ、金をもうけていた。

九日には筑前の表具師がきて、益富家の襖や衝立を張った。この坊主は尺八をよく吹き、亦之助がこれに合わせて三味線をひき、新四郎がうたった。

十六日の朝食事をしていると、クジラが来たこと知らせに來た。そこで見に行くことにして、飯に水かけ一椀食い、舟に乗る。のるが早いか、櫓を押すが早いか、まるで矢のようである。それから、こなたかなたと一日中こぐがクジラは見えない。そこで生月にかえろうとすると、沖の方で旗を振る船がある。船はかえる

のをやめて、その方へと漕いでいく。もう夕方である。

江漢はすっかり弱りきったが、加子たちはいっこうに平気である。こうしてやっと、クジラまで追いついた。すでにすっかり暮れて、海の上に満月がのぼった。ずっと沖合なので、網どりではない。四方から寄っていつて鉾を打ち込む。船をクジラの二、三間のところまでこぎよせ、刃刺(羽指)が軸に立って鉾を打つのであるが、十七隻の船から十七本の鉾が投げかけられ、クジラは十七隻の船を引いていく。ようやく弱ってきたとき、一人がクジラの頭の塩吹きのところへあがって、刃で穴をあけて綱を通す。すると次の一人は綱を持って海にもぐり、下側をまわって向こう側へぬける。全く命がけである。

さて、綱を下にまわすと、大きい船二隻がクジラの両側にびったりと寄り添い、丸太を二本横にわたし、それにクジラをつり上げてくりつける。クジラはまだ生きていて尻尾は動いている。月はこうこうときえて、中央にかかっている。生月になったのは、夜も一時をすぎていた。クジラを解くのは明朝ということになったが、江漢はまだ全身を見て

いない。夜中に見ておこうと思つて納屋にとまることにし、十二時になったら起こしてくれとたのんでおいた。ひと眠りすると、起こす声がするのので、外へ出て見ると、師走の月はさえきつて、空は透明な青白い冷たさであった。

渚は潮がひいて、そこにはまっ黒な、すばらしく大きなクジラが横たわっている。長さ十五間もあるセミクジラである。江漢は亦之助とともにクジラの背にのぼって感慨無量であった。

十七日は早朝からクジラき解がはじまる。数十人が長刀をもってクジラの背にのぼり、切っていく。まず両あごを切り落とし、頭の上を切る。それから尾を切り、背を切り、両脇を切る。そしてろくろでその肉塊をひく。人は切った肉を納屋にはこぶ。納屋には肉納屋、骨納屋、腸納屋があり、納屋の中で骨肉をこまかく切り、十七の大釜にいれて煮る。

油は樋で土蔵におくる。油は二百樽で四百両になる。

二十七日、御崎で六間半ほどのザトウクジラ一頭がとれた。天明九年正月元旦には、又左衛門の家の分家の又右衛門の家へ年始の礼にいった。主人は五十歳、妻は三一、二歳で、

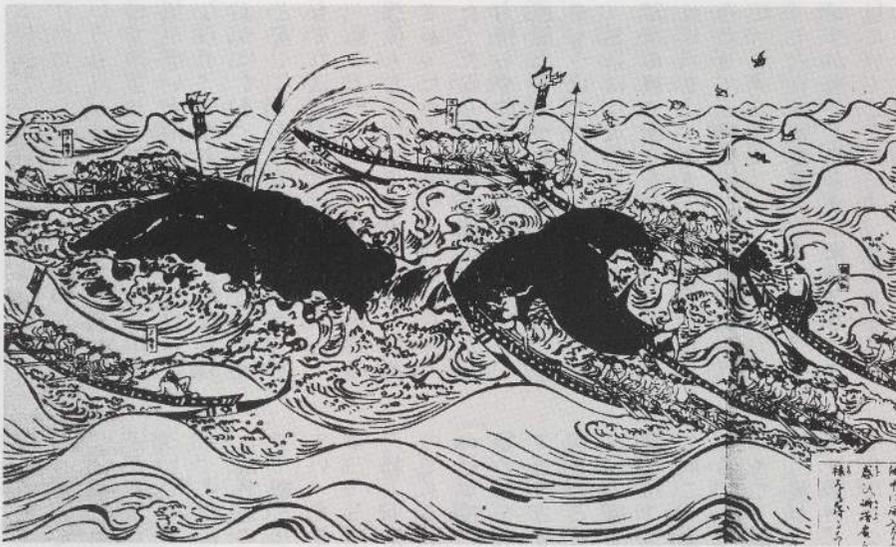
たいへん美人である。筑前からお嫁にきたという。娘が一人あって、年は十六歳ぐらい。緋縮緬の上へ袖に紫または藤色の模様をついた打掛けを着ている。髪は江戸風に似ている。二日、又右衛門が浜に小屋掛けして芝居をして村人に見せることになった。集まる者数百人、又右衛門は人形をつかって見物に見せた。

八日にはまた大島でたくさんクジラがとれたといううわさを聞きつつ、田平にわたつて陸路を調川まで歩いたが、このあたりはまるで田舎で、とめてもらった武野多宮という神主の家は一尺ほど横にまがり、裏口に戸がなく、たいへんきたない家である。いろいろのそばに股引のまま横になると、きたない布団をかけてくれた。生月をわずかにはなれたところにはこんな貧しい生活があったのである。しかし唐津を中心にしては、また生活がよくなっている。以下略

江漢は、運よく海上の捕鯨現場を見る機会に恵まれ、その状況を活写している。しかも、江漢は、鯨が解体される状況までよく観察している。文章も簡略でわかり易く、さすがと思われる。

生月御崎沖背美鯨取絵図(抄)

鯨、網にかかりながら、なお逃れんとす。船の囲みの外に浮出で息を



吐き潮を吹く時、われ劣らじと漕ぎよせ羽指ども表に立上り、鉦を捻って、四、五間を隔るままに投げ突ければ、鉦ぐさと鯨に立つ。

一番、二番と突き立て、舟の鱧に印を立て、なお三本、四本に及べば、鯨海底に没し逃れんとす。その引き行くにまかせ縄を延ばしておくなり。

鉦は生鉄にて先ぶくれなれば曲がれども折れず引けども抜けず、鯨いかにすれども逃れるるよしなく浮き出ず。

鯨出れば待ちうけて又々鉦を突立つるに、そのうなる声は雷の如し。逃げ行くままに舟を引かせながら又々鉦を突くに驚きて又々網中に入るを突き留めるが手柄なりと、おのおの勵み、褒美の禄を得ることなり。

龜陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子 6・西嶋万里子 6
岡部六弥太 6・村上靖朝 6・野野万里子 6
吉村雪江 6・桑形シズエ 6・田上紀子 6
安松勇一 6・上田良一 6・高田浩二 6
桑野次男 6・玉置貞正 6・木戸龍一 6
西島道子 1・6・原重則 6・石橋七郎 1・6
藤木充子 6・和田宏子 6・板本継生 6
行成静子 6・鬼塚義弘 6・吉原湖水 6
中畑孝信 6・片岡洋一 2・6・石川文之 6
橋本敏夫 6・山内重太郎 6・岩下須美子 6
宮崎集 6・岡本金蔵 6・都筑久馬 6
斎藤拓 6・石橋観一 6・三宅碧子 6
星野金子 6・西政憲 6・林十九楼 6
速水忠兵衛 5・宮徹男 5・西村忠行 5
西川真澄 5・古賀清子 5・青柳繁樹 5
吉村陽子 5・安永友儀 5・磯崎啓子 5
織田喜代治 5・横山智一 5・上田博 5
鶴田スミ子 5・坂田敏子 4・伊藤康彦 4
石橋清助 4・塚本美和子 4・寺岡秀實 4
奥田稔 4・原田種美 4・大山宇一 4
長八重子 4・古野開也 3・岸洋子 3
柳山美多恵 3・隈丸清次 3・長尾茂穂 3
井上敏枝 3・平河涉 3・葉山政志 3
久芳正隆 3・吉富とき代 3・川島貞雄 3
半田耕典 3・武藤瑞こ 3・浜野信一郎 3
墨羊子 3・莊山雅敏 3・森本憲治 3
神戸純子 3・黒川松陽 2・野田はつ 2
原敬道 2・木原光男 2・吉田洋一 2
渡辺美津子 2・荒谷幸子 2・前田静子 2
山田博子 2・佐藤泰弘 2・矢富謙治 2
神戸聡 2・星野玄 2・首藤卓哉 2
飯田正幸 2・浜崎信也 2・吉岡克江 2
小川正幸 2・藤野清春 2・熊谷伸吾 2
永岡喜代太 3・岩谷正子 2・林野祥子 2
井手俊一郎 2・増田義哉 2・田里朝男 2
吉田一郎 2・今林法子 2・江頭藤子 2
(前原市) 田比直輝 6・執行敏彦 3
伊藤泰輔 6・田代直輝 6・大野城市
久野敦子 2・渡辺千代子 2・坂井幸子 2
(春日市) 後藤和子 6・足達輔治 6
(筑紫野市) 脇山浦一郎 6・川浪由紀子 6
横溝清 5・川田啓治 6・太宰府市
中村ひろえ 6・佐々木謙 6・古賀謙二 5

- 西尾弘子 5・平岡浩 4・蔵田はつよ
野尻敬子 3・筑紫郡 6・結城慎也 5
(粕屋郡) 榎田正己 6・榎田敏子 6
青木良之助 6・神崎憲五郎 6・友野隆 3
松本雄一郎 4・鈴木恵津子 4・井手俊寿 4
長崎榮市 2・3・井手加維子 3・上杉和稔
(宗像市) 益尾天嶽 5・木村秀明 4
(甘木市) 佐野至 6・井上清 6
黒川邦彦 6・井手至 6・井上清 6
宮崎春夫 6・富田英寿 5・(朝倉郡)
鬼丸雪山 6・山崎エツ子 2・(飯塚市)
(小牟田市) (浮羽郡) 吉瀬義朗 1・6
(大牟田市) 嶽田 6・古賀邦靖 2
(北九州市) 片桐三郎 4・平野 6
中島栄三郎 3・(苅田町) 木下 6
(北九州市) (久留米市) 庄野陽一 6
市丸喜一郎 2・(大分県) 寺川泰郎 6
(柳川市) 樺島政信 2・(直方市)
山本利行 5・勘田祥子 2・(佐賀県)
甲本達也 6・(大分県) (佐賀県)
田本政宏 3・鳥井裕美子 2・(長崎県)
浦上健 3・(熊本県) 濱北哲郎 6
(山口県) 大塚博久 5・(大阪府)
小山富夫 1・6・前田敏也 4・(滋賀県)
辻本雅史 3・(京都府) 松田清 5
武内隆恭 1・(愛知県) 杉浦五郎 5
庄野雄次 5・(神奈川県) 中野晶子 2・6
野崎逸郎 6・大谷英彦 1・(東京都)
山根ちず子 2・6・片桐淳二 4・村山吉廣 3
田中加代 3・大島節子 1・(千葉県)
森久 6・(埼玉県) 間所ひさこ 3・4
(石川県) 丸橋秀雄 4・(宮城県)
田中信彦 1・6

協賛会会員(個人)

- 片桐寛子 (福岡) 6・中村直登 (福岡) 6
笠井徳三 (福岡) 6・菅直登 (福岡) 6
早船正夫 (福岡) 6・浄満寺 (福岡) 6
永田靖邦 (福岡) 6・奥村宏直 (福岡) 6
荒木晴光 (福岡) 6・沖双葉 (福岡) 6
安陪光正 (福岡) 4・梅田光治 (福岡) 5
広瀬忠 (福岡) 4・大里豊男 (福岡) 5
七熊澄子 (福岡) 4・亀井准輔 (福岡) 2・3
熊谷雅子 (福岡) 2・富安渡 (福岡) 1
滝栄三郎 (福岡) 2・上山波 (福岡) 1
小田一郎 (福岡) 1・石橋観一 (福岡) 1

(会員寄稿)

古代の遺蹟と現代の戦跡

友の会会員 小山 富夫

新年早々、先回のネパール訪問にひきつづき、十二回目の世界遺蹟訪問としてカンボジアのアンコールワットとベトナムの戦跡を訪れました。

カンボジアの首都プノンペンは、首都にふさわしく幅広く長い通りと街路樹の続く美しい街です。ポルポト政権時代の暗い内戦や大量虐殺の過去の傷あとも少しづつ消え、再び活気をとりもどしています。マーケットには野菜・果物をはじめ時計・電卓・靴など雑貨類や衣類も豊富に人々の笑顔も見られます。

アンコールワットやアンコールトムはの古代遺蹟はこのプノンペンから西北へ飛行機で約一時間、五百キロメートル離れたシエムリアップ市のジャングルの中にあり、この一帯に数百の古代寺院・貯水池・宗教都城が点在。設立年代はアンコール王朝の九世紀から十五世紀にかけてのもので当時の王朝の繁栄ぶりをものごとがっています。

「アンコールワット」・「アンコールトム」はそれぞれクメール語で

「大きな寺院」・「大きな街」を意味し、ワットの方は東西に数kmある石廊の寺院で、周辺に三重の回廊を持ち、この外壁にヒンズー教の神話「ラーマ・ヤーナ物語」などをテーマにした優美な浮き彫りがびっしりと刻みこまれて、今日なお神々の躍動感が感ぜられ見ごたえがあります。

このアンコールの地は約五百五十年間王都でありつづきました。最盛期にはアンコール都城に六十万人以上が住み、二百以上の寺院に燈火が灯されていたと云われています。

アンコール朝が行った大事業には二つの目的があり一つは雨季(六月十一月)の大量の雨水の処理、もう一つは乾期(十二月五月)に水を確保することでした。歴史の王たちは次々と大貯水池・導水路・環濠・橋・運河・堤防などの諸施設を建設しました。その結果、耕地面積が拡大し、農業生産が発展し、人口も増加し、繁栄をむかえジャヴァルマシ七世の頂点時はインドシナ半島の大半を支配する大帝国内まで成長しました。

しかし、七世の死後急速に衰退に向かい、広大なため、かえって水利施設の維持が困難となり、広大な土地もわずか数十年のうちに荒廃し、

- 南 誠次郎(春日) ⑤・木原 敬吉(飯塚) ⑤
具嶋 菊乃(甘木) ④・坂田貞治(甘木) ①
大久保津智夫(嘉穂) ⑤・庄野 直彦(直方) ④
原田 國雄(宗像) ⑥・森光英子(久留米) ③
西喜代松(北九州市) ⑤・永井 功(北九州) ②
花田加代子(遠賀) ③・本村 康雄(三池) ②
中山 重夫(唐津) ④・緒方 益男(佐賀) ⑥
七熊太郎(佐世保) ⑥・七熊 正(佐世保) ④
浦上 健(長崎) ②・田中 貞輝(愛媛) ③
小堀 定泰(滋賀) ③・伊藤 茂(神戸) ①
西村 俊隆(東京) ⑤・白木 義晴(東京) ⑥
早船 洋美(東京) ①・翠川 文子(埼玉) ②
石野智恵子(東京) ④・多々羅幸男(千葉) ⑤
江崎正直(東京) ⑤

【法人協賛会員および特別協力法人】

- 九州電力 株・大野 茂(福岡)
株・新出 光・出光 豊(福岡)
出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)
株・福岡中央銀行・山本勝一郎(福岡)
株・福岡整形外科 南川勝三(福岡)
株・日本製粉福岡工場・白尾嘉弘(福岡)
福岡県警備業協会・村上五一(福岡)
流通共済 株・花田積夫(福岡)
株・タイム社印刷 株・安部博満(福岡)
株・笠 組・笠 忠夫(福岡)
株・博多ちくわ 株・魚嘉・松尾嘉助(福岡)
株・権藤 株・権藤成文(福岡)
株・協通配送 株・平野孝司(福岡)
株・大牟田運送 株・本村康雄(福岡)
株・三島設計事務所・三島庄一(福岡)
株・日西物流 株・原 重則(福岡)
株・西日本急送 株・原 重則(福岡)
株・愛宕建設工業 株・野村六郎(福岡)
株・東洋特殊機工 株・西尾敏明(福岡)
株・西トラック運送 株・西尾秀明(福岡)
株・南愛光ビルサービス 株・野田和福(福岡)
株・南ククリン開発 株・野田和福(福岡)
株・延寿産業 株・池田邦夫(福岡)
株・九州三菱ふそう自販 株・宮崎慶一(福岡)
株・木原安河内商店・安河内紀男(福岡)
株・木原税理事務所・木原敬吉(飯塚)

※新規の御加入(先号以後、平成八年四月三十日現在)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。

友の会 年間3千円
(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円
(法人) 年間3万円

館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける。

納入方法 郵便振替 0173019160970

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

図書出版

「閨秀 亀井少棠伝」 詩、書、画の作品で仙厓の次に多いのが同時代の亀井少棠。しかも少棠には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本
限定二、〇〇〇部
直売頒価 三、〇〇〇円(送料 三三〇円)

「江河万里流る」

九大はもとより東洋諸国の大学教授はじめ、中国哲学専攻又は愛好同士のよってさらなる孔子学の歴史と精神が集約された寄稿三十一名の論文集大成として貴重な文献、また、平易に親しめる儒学精通書。

B5版・本文328頁
限定二、〇〇〇部
直売頒価 二、五〇〇円(送料 三八〇円)

能古博物館だより

アユタヤ朝との戦いに敗北し、王都は千四百三十一年頃に放棄され、アソコール朝は終わりをむかえました。まさに農業というハイテク産業基盤に支えられた文明は、水利システムとの崩壊とともに滅亡したのです。

今、このジャングル帯には観音菩薩や永遠の微笑をもった東洋のモナリザと云うべき仏面彫刻など、莫大な数の文化遺産があり、静かにジャングルの中で消滅している様は不気味と同時に感動的でもあります。中には、タブルーム寺院のように榕樹の根が寺院の屋根まで覆っている様は自然の驚異を感じ、自然の中へ、人工物が再び回帰してゆく光景に一つの美学を感じます。

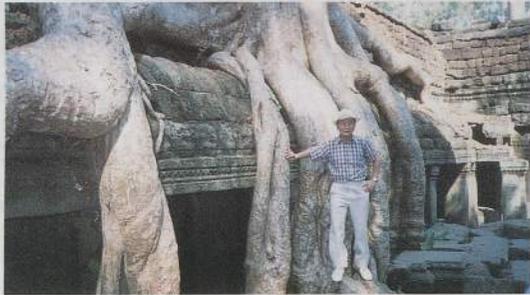
次に、ブンペンから空路で三十分、二百五十キロメートル離れたベトナムの南部ホーチミン市(旧サイ



ゴン市)は目まぐるしいバイクの洪水で驚くようなエネルギーに満ちあふれています。輸入ブランド品や、高級品が店に出回り、若者たちはこそっとおしゃれをしています。街はまさに建設ラッシュ、ここがかつての戦火で荒廃したベトナムかと思うほど近代的なホテルが次々とオープンしています。「東洋のプチパリ」と云う呼び名にふさわしい感じがします。

然し、不思議なこと

にこの発展と相反する本来のベトナムが共存しています。昼寝の習慣、アオザイとノン(すげ笠)姿、いたるところに屋台、ヌックマム味(ベ



トナム産しょう油)がベースの独自の料理。この共存の中で人々は豊かな生活に向かって必死にまっすぐ生きています。ベトナム戦争終結より二十年長過ぎた冬に終止符をうち、人々はようやく自分たちのために働きはじめています。(一九九六年一月十三日から一月二十日の旅行記)

編集後記

能古博物館の桜が益々美態を加えています。三月末から咲き始め、四月には六分咲き、途中で一寸雨に見舞われましたが、快調をつづけ五日頃には八分咲き、樹高が高いのがなお映えて仰ぎ見られます。

もともと雑木林の中で百年を越す在り方は枝を張らず、上にに伸びるほかなく、山桜の強さを持ち樹間の竹笹を刈り取られたのが幸いして樹勢を盛りにしたと思われまます。養生肥も適当に加えた効果も見えるようです。

本年から、博物館花見をご案内しましたが、来年からは本格的に会員はじめ皆様に桜を加えて館の感謝を披露できると自信にしております。

散り始めるとなお風情を増します。小さい樹の芽も沢山立つのを見ながら、雑草の刈り込みで一斉に切払われていたが、これは用心して親子桜を形にしたいと考えます。山桜の強さを發揮させて代々をつくりたいと思います。

常設「植物画」作品展示と講座開設のご案内

会の内容も、いよいよ五月から、元木敏博先生の「植物画展」の常設と「植物画講座」を開設ご案内。これは次の通り

- (1) 入門・初級コース 受講20名 毎月第2木曜日(月一回) 時間・午後一時〜三時三十分 期間 一年間
- (2) 中級・上級コース 受講限定10名 毎月第3木曜日 期間 二年間 時間 午後一時〜三時半

能古博物館ご案内

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
 休館日 毎週月曜  
 (月曜日が祝日の場合は次の日)  
 12月29日~1月3日  
 入館料 大人300円・中高生200円  
 交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
 →能古(徒歩5分)→博物館  
 〒819 福岡市西区能古522-2  
 ☎(092) 883-2881・2887  
 FAX(092) 883-2881